

## 世界農業遺産国際スタディ・プログラム 研修レポート

## 総論

私は大学入学後に初めて能登半島に関心を持ち、震災前から研修・地域活動・ボランティアなどを通じて継続的に関わってきた。しかし、それらはいくまで個別の現場やイベント単位での関わりが中心であり、「世界農業遺産・能登」を体系的に理解しているとは言いがたく、現地に関する一次情報の不足も自覚していた。そのため本プログラムに参加するにあたっては、とりわけ「景観そのものではなく、景観をつくる“人”をどう支えるのか」、また「震災後の復興に格差や“構造的な歪み”を生まないために、どのような仕組みと連携が必要か」という点に意識的に焦点を当てることにした。

三日間の能登研修を通して、私の能登に対する価値観は大きく変化した。当初の私は、どこかで能登を「風光明媚な観光地」か、あるいは「支援すべき被災地」として見ていた部分があったと思う。しかし、のと里山里海ミュージアムで古代からの交流史に触れ、白米千枚田や奥能登塩田村で農業・製塩を支える高齢の担い手の声を聞き、ノトハハソやしたひら鮮魚店で経営と暮らしのリアルな判断を伺う中で、能登はそうした単純なラベルでは捉えきれない、「自然と生業と文化が複雑に絡み合うフィールド」として立ち現れてきた。

特に大きかった変化は、「支援」や「人口確保」についての自分の考え方である。参加前の私は、ボランティアや移住者が増えれば地域は助かる、ブランド化が進めば地域産品は守られる、といった比較的ストレートなイメージを持っていた。しかし、現場の声を傾けると、短期ボランティアが必ずしも千枚田のニーズに合っていないこと、法人化やブランド化が高齢の小規模団体の負担を増やしうること、祭りや観光への支援が「大きな祭り」や「分かりやすいコンテンツ」に偏ることで「祭りの格差」や地域内の歪みを生みかねないことなど、ローカルな現実が見えてきた。谷川醸造やしたひら鮮魚店のように外部市場へ打って出る事業者がいる一方で、珠洲の米農家のように、効率よりも顔の見える関係性を重視し、あえてネット販売や拡大路線に慎重な選択をする事業者もいる。また、ノトハハソのように、一步を踏み出そうとしても人手不足で断念せざるを得ない事業者もたくさん存在している。そこには「正解のない時代」において、何を変え、何を守り抜くのかを、それぞれの現場が自ら考え抜いた結果としての多様な判断があった。

また、「世界農業遺産」や「ブランド」という言葉についても、以前より複雑な感情を持つようになった。景観や産品が注目されること自体は地域にとってチャンスである一方で、担い手不足や気候変動、コスト高騰といった足元の課題は可視化されにくい。ブランド力が高まるほど、価格上昇によって地元の人が自分たちの食文化にアクセスしづらくなる可能性もある。私は、復興や地域振興の「光」の側面だけでなく、その裏側にある「影」や構造的なゆがみを想像する視点を持ち続けたいと感じた。

能登半島地震からの復興は、まだ道半ばである。しかし、谷川醸造の柔軟な挑戦、奥能

登塩田村やノトハハツの静かな決意、千枚田や能登ひかりを守る農家、したひら鮮魚店の  
ような小さな事業者の工夫の積み重ねのなかに、「創造的復興」の芽が確かに息づいてい  
ると感じると同時に、地域ならではの課題と、復興事業の「光と影」を以前より具体的に  
イメージできるようになった。能登半島の課題と経験は少子高齢化が相当進んでいる北陸  
や日本だけでなく、これからの都市化に伴う過疎化・人口減少に直面し合う世界にとっ  
ても価値が大いにあると信じている。本プログラムには発表をもって一つの区切りがつく  
が、私にとってはここが始まりである。今後、自分がどのような形で能登や同様の地域に  
関わり、支えていけるのか。本研修で得た気づきと違和感を起点に、引き続き考え続け、  
自分なりの行動へとつなげていきたい。